

第十三回「いのちの授業」大賞 受賞一覧

【大賞（知事賞）】

作品名 「わかり合おうとする一歩」
 筆者 古田 陽世莉 相模原市立相陽中学校 二年
 授業実践者 橋本 美樹 相模原市立相陽中学校 教諭

【教育委員会賞】

作品名 「あの日いのち」
 筆者 西濱 千夏 神奈川県立平塚ろう学校高等部 二年
 授業実践者 相澤 裕子 神奈川県立平塚ろう学校 非常勤講師

【神奈川県新聞社賞】

作品名 「しらなかった言葉」
 筆者 村田 うの 平塚市立港小学校 二年
 授業実践者 笹本 弥生 おはなしひろば「イルカのおやこ」 代表

【tvk賞】

作品名 「ありがとう、おぐら。」
 筆者 藤林 日彩 神奈川県立相原高等学校 二年
 授業実践者 杉山 由吏 神奈川県立相原高等学校 教諭

【神奈川県PTA協議会会長賞】

作品名 「いのちの授業」
 筆者 熊澤 美都 聖和学院中学校 三年
 授業実践者 鎌田 實 講師（諏訪中央病院 名誉院長）

【ともに生きる社会かながわ憲章賞】 作品名 「視覚障がい者の長谷川先生のお話」

筆者

小林 美緒

厚木市立愛甲小学校 四年

授業実践者

長谷川 浩志

講師（神奈川県立二俣川高等学校 教諭）

【優秀賞】

筆者

上口 蓮将

横須賀市立追浜小学校 一年

授業実践者

上口 優花

保護者

【優秀賞】

筆者

森川 さつき

伊勢原市立伊勢原中学校 二年

授業実践者

陳 央仁

講師（龍ヶ崎済生会病院 医師）

【優秀賞】

筆者

大曾根 結真

相模原市立相陽中学校 二年

授業実践者

橋本 美樹

相模原市立相陽中学校 教諭

【優秀賞】

筆者

生井 木彩

神奈川県立二俣川高等学校 二年

授業実践者

多和田 奈津子、杉山 愛

講師（神奈川県がん患者団体連合会）

【優秀賞】

筆者

武藤 美桜

神奈川県立相原高等学校 三年

授業実践者

佐々木 真彩

神奈川県立相原高等学校 教諭

大賞（知事賞）

「わかり合おうとする一歩」

相模原市立相陽中学校

二年 古田 陽世莉

違うことは悪いことではない。あの子が教えてくれました。小学生の頃、私の登校班に唯一同じ年の男の子がいました。彼はいつも怒ったり、叫んだりしていて登校班の人達によく、冷たい視線を向けられていました。きっと彼が他の子とは少し違ったからだだと思います。友達やその親は「可哀想」「気持ち悪い」と言って彼を軽蔑していました。私も周りに合わせて彼を避けていました。しかし、母は違いました。母は、毎日のようにしゃがみこんだり、パニックになってしまう彼のそばに行き、優しく声をかけたり、背中をさすったりして落ち着かせていました。その行動を見て周りの親は「出発時間遅れるんだけど」と言って迷惑そうな顔をしていました。私はなぜそこまで言われても彼のそばにいてあげられるのか理解できませんでした。そこで私は、そのことについて母に尋ねました。すると母は、優しく落ち着いた口調で言いました。「あの子はよく怒ったりしているけどあの子なりに気持ちを落ち着かせようと努力している優しい子だからそばで支

えてあげたいの。」私はその言葉を聞いて、自分は今まで彼の努力を知ろうとせず、他の子とは違うからという理由で周りに合わせて悪口を言い、傷つけてしまっていたことを深く反省しました。

その出来事から私は、自分なりに彼の支えになろうと母と一緒に彼のそばにいくようになりました。声をかけることはできなかったけれど、周りの嫌な言葉に耳を傾けずに見守っていました。このようなことが続き、彼が落ち着いて登校できる回数が増えていきました。

しかし、それから数カ月が経った頃、学年集会で体育館に集まり、周りが静かな中、彼が急に大きな声で叫び始めたのです。先生達は怒って彼の腕を引き、外へ連れ出しました。周りの生徒はその光景を見てクスクス笑い始めました。「頭おかしいよね」「あれ障がい者でしょ」そんな言葉が私の耳に入ってきました。すると隣にいた友達に「あいつ気持ち悪いよね」と言われました。私は怒りが湧き、とっさに強い口調で「そんなことない。あの子だって一生懸命頑張っているんだよ」と言ってしまうました。今考えるとこんなにはつきりと自分の思いを伝えられたのは「もう周りに合わせて彼を傷つけない」という意思があつたからだと思います。

その日の帰り道、人けの少ない場所で彼が泣いているのを見かけました。いつも以上に辛そうでした。私は彼のそばに行き「大丈夫？」と声をかけました。すると彼は、涙をぬぐ

いながら小さな声で「ごめん」と言いました。私はその言葉を聞いて彼の優しさを感じました。

初めの頃、私は周りに合わせて悪口を言い、彼を傷つけてしまっていました。しかし、母の言葉で「彼の支えになりたい」という気持ちに変わりました。この変化は私が彼の気持ちを理解しようとしたからこそあるものだと思います。そして、理解しようとしたことで私は彼の優しさや苦しみに気付くことができました。

この経験を通して私は、誰かと違う特性をもつ人に対して偏見をもつのではなく、相手の立場や気持ちを想像し、理解しようとする「他者理解」が大切だと考えました。この「他者理解」の大切さを知ってもらうためにもまず、周りとは違う感じ方や考え方をする人などの「違い」＝悪いことではないということを理解してほしいです。

私は彼のように自分の気持ちをうまく伝えられずに怒ったりしてしまう人でも、周りが理解して安心して過ごせるような社会になることを願っています。

教育委員会賞

「あの日のいのち」

神奈川県立平塚ろう学校高等部

二年 西濱 千夏

一九四五年八月六日、あの日は彼女たちにとって何でもない日常だった。しかし、あの一瞬で日常が失われてしまった。

アメリカによって原爆が広島に落とされた。死者は、約十四万人が亡くなったと聞いている。それは、日本国民にとって忘れられない出来事だ。そのことを国語の授業で原爆について勉強した。授業で原爆に関係した文章を読んでもそこには、原爆が落ちる直前に、人々が着ていた服の写真が載っていた。それは、少女たちが着ていた服の写真だった。とてもオシャレな服だった。

「戦争中なのにオシャレな服を着てるんだ」と勝手な思いこみをしてしまったが、よく考えてみると戦争中だった為、精神的に不安定だっただろうなと思った。なので、気分を上げるためにオシャレな服を着ていたのだと私は感じた。それにしても、真夏のまっ盛り、更にその服の上にモンペなどを着ていたことを思うとオシャレにも根性が必要だったに違いない。教科書や授業で原爆について学んだことで、想像を絶する苦しみがあったことを改めて知った。戦争中も、彼女たちは私たちと同じように「オシ

ヤレを楽しみたい」という気持ちがあったということだ。その人たちが、どのような気持ちで服を選んで着ていたか、そう想像するだけで、とてもせつない気持ちになった。そして日常を一瞬で全てが奪われたことと、命の重さを感じた。原爆が怖いのは、街を壊すだけではなく、人々の「当たり前前の生活」を突然奪い去ったことだと思う。この出来事は、原爆の悲劇を、被害の規模を表す数字としてだけではなく、私たちの心に深く響く形で伝えてくれる。沢山の命が失われた裏には、一人一人の人生があったのだろうと改めて分かった。

私たちは、この悲しい出来事を忘れてはいけなく強く思う。二度とこんな間違いを繰り返さないために、平和がどれだけ大切かを次の世代にも伝えていくこと。そして、核兵器のない世界、争いのない世界を作るために、私たち一人一人ができることを考えることが本当に大事だと感じる。

今も世界では戦争が続いており、核の使用が危惧されている。ヒロシマの悲劇が繰り返されようとしている。同じような年齢の少女は、ヒロシマの少女達と同じようにシェルターに逃げ込む時に大好きな洋服を持っていくかもしれない。

今、世界で起きていることは「対岸の火事」などではなく、日本に生きる私達にも、じわじわと危機が迫りつつあり、かつての戦争によって取り戻した「平和」をおびやかす出来事なのだ。

そうならないためにも、もう一度真剣に考えたい。それが私達若者の使命なのだから。

神奈川新聞社賞

「しらなかった言葉」

平塚市立港小学校

二年 村田 うの

広島、原子ばくだん、空しゅうけいほうなど、わたしは二年生になってからたくさんのお言葉にであいました。きっかけは公明さんでイルカのおやこが夏休みにじょうえんする「はだしのゲン」のそう作げきに出えんすることにしたからです。

げきのはじまりの「きょうのようにあつい夏の日でした」というナレーションが、タイムマシーンにのってせんそうのじだいにつれて行かれてしまうみたいで少しこわかったです。だからじょうえんの日は、雨がふってすずしくなるとねがいました。いしうではじめてモンペをはきました。チクチクして、ダボダボでかわいくないふくでした。「やあい、ひこくみん」というセリフが、早口言葉みたいでおぼえられなくて、手のひらにペンでセリフをこっそり書いていました。せんそう中の言葉ばかりでむずかしく、広島べんは、がいこくごみたいでした。

いみが分らないせんそう中の言葉は、はくぶつかんへ見にかけてみました。はくぶつかんのガラスケースの中にしよういだんも竹やりもしようしゅうれいじょうも国みんふくもありました。

ふるびていましたが、ぜんぶ本ものです。名まえもついていました。もちぬしの人がはくぶつかんにあずけたそうです。八十年まえの日本は、アルファベット文字もカラフルな色もかわいいキャラクターもないかんじばかりのせかいだったと分かりました。わたしのすんでいる平塚でも七月十六日によるに大空しゅうがあつてやけのはらになったそうです。わたしが通っている小学校は、国みんだい二学校なんてよばれていたなんてしらないことばかりでした。

しらなかった言葉を学ぶうちに、しらなかったいのちのストーリーを学ぶ夏休みになりました。わたしは、学校で「いのちは大切」となっています。でも、八十年まえの日本では、いのちは大切ではなかったみたいでした。まい日のようにポンポンときえていくいのちは、まるでシャボン玉みたいです。わたしは、きえてしまったいのちのことを学んでいのちを大切にできる人になりたいと思いました。

「ありがとう、おぐら。」

神奈川県立相原高等学校

二年 藤林 日彩

「いのち」。高校に入学する前は、なんとなく「大切なもの」
と置いていたけれど、それ以上深く考えたことはなかった。私は
農業高校に通っていて、学校で牛のお世話をしている。最初は、
大好きな動物と触れ合うことにワクワクしていた。けれど、飼育
することは決して楽なことばかりではなかった。当番がある日は
朝早く学校に来て搾乳、餌やり、除糞などのお世話。そんな中で
も自然とおぐらという一頭の肉牛に心を惹かれていった。おぐら
は人懐っこくて、撫でると気持ちよさそうに首を伸ばす。手を止
めるともつと撫でてといわんばかりの顔でこっちを見つめ、首を
伸ばしてアピールしてくる。その姿がかわいくてたまらなかった。
そんなある日、おぐらの出荷が近づいていることを知った。わか
っていたはずだった。おぐらは愛玩動物ではなく産業動物。私た
ちが育て、最終的には出荷し、食肉として人のもとへ届く。で
も、ある日を境にいなくなるって頭で理解していても心がついて
こなかった。出荷の日が近づくにつれ、牛舎に行くたびにあと何
回撫でられるのかなと考えてしまい、自然とおぐらを撫でる時間
が長くなっていった。私が悲しい気持ちで撫でるたびにおぐらは

そんなことは知らずにいつもと変わらず首を伸ばして「もつと撫
でて」と甘えてくる。その姿がたまらなく切ない。その日から私
は「いのち」について考えるようになった。私たちが何気なくこ
飯を食べている背後には確かに生きていた命がある。スーパーに
並ぶお肉の一つ一つには名前はなくとも誰かが愛情を込めて育て
た命がある。おぐらも私たちの愛があったからこそ、ただ消費さ
れるだけの命じゃなく、ちゃんと大切にされた命になったと思う。
私はおぐらに会うたびに「ありがとう」と心の中でつぶやくよう
になった。ありがとう。生まれてきてくれて。育てさせてくれて。
そして、私たちのために自分の命を差し出してくれて。出荷の日
きつと涙は止まらないと思う。だけど、この経験は一生忘れない。
出荷される直前まで私はおぐらのそばに寄り添い続けたいと思う。
心の中で何度も「ありがとう」とつぶやきながらいつも通りに撫
でて、おぐらの温もりを感じていたい。おぐらは、私に命を育て
るといふことの意味を教えてくれた。そして、命と向き合い、命
を送り出すという意味を教えてくれた。それは経験しなきゃわか
らない、言葉だけでは伝えきれないすごく大切なことだと思う。
命を育て、命と向き合い、命を見送る。この流れが今の私にとつ
ての「いのち」だ。これから私は食べ物にもつと感謝をして生き
ていく。それが命をいただく者にできる最大の恩返しだと思う。
「いのちをいただく」という言葉の重さを私はおぐらから教えて
もらった。たとえ会えなくなってもおぐらは私の心の中でずっと
生き続ける。ありがとう、おぐら。そして、いただきます。

神奈川県PTA協議会会長賞

「いのちの授業」

聖和学院中学校

三年 熊澤 美都

「いのちって何だろう？」そんなことを深く考えたのは、講座で見た一本のアニメがきっかけでした。講座では「1ニュートンの勇気」というアニメを見ました。この作品は、実際に起こったいじめの事件をもとに作られているそうです。初めはただのアニメだと思っていたけど、話が進むにつれて気持ちがどんどん重くなり、胸が苦しくなりました。

アニメの中では、体の大きな男の子たちに、一人の男の子が何度も殴られ、頭をコンクリートに打ちつけられる場面がありました。そのときの表現が、「お弁当箱に入ったお豆腐を地面に投げつけたようだった。」というもので、その言葉がずっと心に残っています。いじめを見ていた周りの子たちも、怖くて何もできなかったそうです。しかもその男の子はお母さんに「友達とカラオケに行ってくるね。」と言って出かけたまま、病院で一粒の涙を流して亡くなったそうです。

もし私がいつも通り「いってきます。」と言って出かけたまま、帰らなかったら。きっと家族は深く悲しむと思います。逆に、も

しお母さんが「ちょっと買い物に行ってくるね。」と言って出かけて、二度と帰ってこなかったら、私はどうしたらいいかわからず、何日も何日も泣いてしまうと思います。その男の子のお母さんの気持ちを思うと、胸が苦しくなりました。

実は私の母も、病気で手術を受けるために入院していたことがあります。そのときはとても心配で、毎日「ちゃんと帰ってきてくれるかな。」と不安でいっぱいでした。したがって、命の大切さや、大切な人を失うかもしれない怖さを少しでも理解できた気がします。さらに、数年前には父方の祖母が亡くなったこともあり、当時私はまだ小学生でしたが、お葬式の雰囲気がとても怖くて、初めて身近な人が亡くなるという体験をしました。胸にぽかんと穴が空いたような、不思議で悲しい気持ちでした。

命について考える機会は、講座だけではなく、こうした家族の経験の中にもありました。いじめが命を奪うほどの重いものであること、そして見て見ぬふりをしてしまうことの恐ろしさを知りました。もしあのとき、誰かが勇気を出して助けていたら、命を救えたかもしれません。私はそんな後悔をしたくないし、誰かの命を守る行動ができる人になりたいです。

私は、いじめる側にも、いじめられる側にも絶対になりたくありません。でも、それだけでなくいじめを見たときに何もせずに見ている側にもなりたくないと思いました。たった一つの命がなくなることで、家族や周りの人がどれだけ悲しむかを、講座や家族の出来事を通して深く知ることができました。そして、自殺な

ども絶対にあつてはならないことだと感じました。命は一人ひとりにとつてたつた一つしかない大切なものです。だから、みんなに命を大切にしてほしいし、私も自分の命をこれからもっと大事にしていきたいです。

講座と、自分の身の回りで起きた出来事の両方を通して、命の重さと大切さを心から学びました。いじめのない、誰もが安心して暮らせる優しい社会を、私たち一人ひとりの行動でつくっていったらいいなと思います。

ともに生きる社会かながわ憲章賞

「視覚障がい者の長谷川先生のお話」

厚木市立愛甲小学校

四年 小林 美緒

先日、総合の学習で、視覚障がい者の長谷川先生のお話を聞きました。長谷川先生は、横浜の高校で先生として働いているそうです。

視覚障がい者の人は、目が見えないので、日じよう生活を送るためにいろいろな工夫がありました。長谷川先生はいろいろな道具を使用していました。視覚障がい者の人のためにシャンプーにきざみがあったり、階だんのようにになっている計量カップがあったり、写真をとれば、書いてある文章を読んでもくれるアプリがあったりして、いろいろな便利な物もありますが、長谷川先生は、

「視覚障がい者にとっては、まだまだだ。」

と言っていました。でも、シャンプーのきざみなどは、私たちにとっても便利です。障がいのあるなしに関わらず、みんなにとって便利な道具がふえていくと、もったいいと思います。

長谷川先生は、もうどう犬ではなく白じようを使用しています。なぜなら白じようを持っていると、周りの人が声をかけてくれたりして安心して歩けるし、信号が今何色か周りの人が教えてくれ

たりして、親切にしてくれるからだそうです。そして、街を歩くときに友達などがいれば、助けてくれるので、百倍くらい安心してきるそうです。でも、一人で横だん歩道をわたるときは、車にひかれてしまうかもしれないので、十分気を付けているそうです。私は、これから視覚障がい者の人のために、声をかけて助けてあげたいです。そして、信号が青信号なのにわたっていないから、

「今は青信号なので、わたっていいですよ。」

と言って助けてあげるなどして、視覚障がい者の人の力になりたいです。

優秀賞

「ぼくのたいせつなかぞく」

横須賀市立追浜小学校

一年 うめぐち れんすけ

ぼくは8にんかぞく。ぱまおねえちゃんおとうとそしてぼくにねこが3びき。まいにちいっしょにくらしたいせつなかぞく。さいしょにきたねこは、あしえる。つぎにきたねこは、るーかす。さいごにきたねこは、ココ。みんなばらばらなところでうまれてぼくのいえにやってきた。あしえるはるーかすのそばでねるのがすき。ココは、るーかすとあそぶのがすき。でもあしえるとココは、あまりいっしょにいないかも？るーかすは、2ひきのねことなかよしでぼくたちかぞくにもあまえてくるにんげんだいすきねこ。

でも6がつのあるひげんきがなくなってままがみんながしごと、がっこう、ようちえんにいったらどうぶつびょういんにつれていこうとおもいおとうとをようちえんにおくりかえってきたらさつきまでうごいていたしんぞうがとまりもううごかなくなっていたそう。15ふんくらいのことだつて。るーかすは、みんなをみおくってからなくなったんだ。

ぼくがかえってきたらかたくなつてうごかないるーかすがいた。

おねえちゃんがかえってきたらるーかすをみてなぎだした。ぼくは、るーかすにてがみをかいてわたした。

るーてんごくにいくんだよ。ありがとう。つて。さつきまでがまんしていたのになみだがとまらなくなった。ままもおとうともみんなでないた。あたりまえにいつもいた。

かぜをひいてねていればそばにきてみまもる3びきのねこ。ぼくたちがぱまとままにおこられたらしんぱいそうにそつとちかくによりそう3びきのねこ。いつもいっしょの3びき。でもいまは2ひき。ゆつくりしたいあしえるにあそんでほしいココ。しばらくけんかしていたけどさいきんやつと2ひきがちかくにいる。るーかすは、ぼくたちかぞくにもたいせつだったけどねこたちにもたいせつだったんだなとおもった。ずっとないていたらままがにじのはしのはなしをしてくれた。

くるしみからかいほうされてなかまとたのしくあそんでいるよ。きつと。そしてみんなとのさいかいをまつているよ。だからまたいつかあえるから。ままがるーかすは、おそらからみてるからまいにちたのしむんだよ。そうするとあんしんするはずつて。

だからたまにそらをみてるーかすをさがすけどみつからない。くるしまないですむおそらでたのしくあそんでいるといいな。ぼくもたのしんでいるよ。でもやつぱりるーかすがいないのは、さびしいな。しゃしんは、いっぱいあるけどもうさわれないしいっしょにねることもできない。おやつだつてあげたいしぼーるであそびたい。まだまだいっしょにいたかった。

いのちのことをはじめてわかった。たいせつなかぞくがしんで
しまうのをはじめてけいけんした。だから2ひきのねこをたいせ
つにする。じぶんのこともたいせつにする。みんなたいせつにす
る。ーかすかぞくになってくれてありがとう。ずっとずっとか
ぞくだよ。きょうもぼくは、げんきだよ。

優秀賞

「限りある命を」

伊勢原市立伊勢原中学校

二年 森川 さつき

今年七十五才になる私の祖父がこの前終活ノートとやらを書いていた。そこにはどんな葬儀にしてほしいかだったり死ぬまでにやっておきたい事リストなど将来祖父が亡くなってしまふ時のための事がこと細かく書きつづられていた。

毎日散歩に行き、神社の掃除をして、庭の手入れをかかさない、そんな祖父も自分の亡くなる時のことを考え準備をし始めている。書き終えた祖父の終活ノートを盗み見て何とも言えない気持ちになった。

祖父はおとしの秋にすい臓がんになり、手術をした。今は元気になったものの、退院してからは抗がん剤の影響でもともと細かった体はさらに痩せ細り、表情が暗くなっていったのを覚えている。

ノートの言葉や見たためから祖父の死を意識させられた。どんなに大切な人も亡くなってしまうことを実感した出来事だった。

この世の全ての「いのち」には終わりがあり、二度と同じいのちに生まれはしない。私達の命は大切に限りある一日一日を大切に

に生きていかなければならない。

祖父のノートには、

「孫の成人の振り袖姿が見たい。それまでは死なない。」

とあった。自分の命は自分だけのものでなく周囲の人の生きる糧でもあるということに気づいた。だからこそ自分を大切にすべきだ。

これからあと何年祖父と居られるのかは分からない。だから一緒に居られることに感謝して暮らしていきたい。そして祖父が居なくなったその先も毎日を丁寧に自分を大切にして意味のある人生を送っていくつもりだ。

優秀賞

「みんなにはない特別」

相模原市立相陽中学校

二年 大曽根 結真

僕には、一個下の弟がいます。弟は発達障害をもっています。弟に障害があると親に言われたのは、彼が七歳のときでした。僕はまだ小学生で、うまれた時から父はいない生活でした。家族は母と僕と弟の三人だけでした。そんな中で家の雰囲気は他の家と違っているのを感じていました。母が弟を連れて何度も病院へ行き、難しい顔をして帰ってくる日が何度もありました。弟は言葉づかいがわるく、話す代わりに大きな声を出したり、床や壁を叩いたりして自分の気持ちを表していました。おもちゃの遊び方も他の子と違っていて、ブロックを何時間も並べていたり、同じテレビを何度も見続けたりしていました。最初は、「ちよつと変わってるな」と思っていたけれど、次第に「普通じゃないのかもしれない」と思うようになりました。学校では友達に「お前の弟、変わってるな」と言われたことがあります。冗談のつもりだったのかもしれませんが、僕は笑えませんでした。弟が変なんじゃないか、周囲の理解が足りないだけだと、心のどこかで思っていたからです。でも、そう思っても、当時の僕はそれをうまく言葉に

できず、何も言い返せなかったことが悔しくてたまりませんでした。家では、母が弟にかかりきりになることが多く僕は「お兄ちゃんなんだから」と我慢することが増えました。僕だって母とはなしたりしたいと思っていたけれど、弟の世話で忙しい母の姿を見ていると、その気持ちを口にすることができませんでした。弟のことを大事に思う一方で、どこか淋しさを感じていて、自分の中にモヤモヤがたまっていきました。そんなある日、母が「たまには三人で出かけよう」と言ってくれて、久しぶりに公園へ行きました。弟はお気に入りのシャツを着て、元気に走り回っていました。僕はベンチに座って、その様子を眺めていました。すると、近くにいた小さな子が、「あの子、なんでぐるぐる回っているの」と母親に尋ねているのが聞こえました。そのお母さんが「ちよつと特別なのよ」と優しく答えていました。その言葉を聞いたとき、僕の心がすつと軽くなった気がしました。「特別」という言葉には責める感じがなく、ただ違いを認めているような優しさがありました。その日から、僕は弟のことをもっと知りたいと思うようになりました。発達障害について本を読んだり、ネットで調べたりしていくうちに、弟がどんなことで困っていて、どんなことが得意なのか分かってきました。弟は人と目を合わせるのが苦手だけれど、小さな音に敏感です。言葉で気持ちを伝えるのが難しくても、表情や行動で一生懸命思いを伝えようとしています。家に帰ってから、今日思ったことについて話し合いました。母は、「弟なりの感じ方や反応がある。それを異常と見るのではなく、

違いとして受け入れてほしい」と言いました。僕は初めて「弟の困りごと」は、本人のせいじゃなくて、まわりが理解していないからこそ起きてしまうこともあるんだ、と気づきました。

発達障害は、見た目では分かりにくい障害です。だから、「わがまま」「空気が読めない」「甘やかされて育った」といった誤解をされることも多いです。でも、それはたいてい、知らないことから生まれる偏見だと思います。もしもっと多くの人が、発達障害について正しく知っていれば、弟のように困る人も減っていくはずです。

人権とは、すべての人が自分らしく生きていくために大切な権利です。発達障害のある人もそうでない人も、同じように安心して暮らす権利を持っています。でも現実には、弟のような人が「変わってる」と言われたり、「迷惑だ」と思われたりすることもある、それは人権がちゃんと守られていないということなんだと、僕は思います。

僕たちにできることは、まず「知ろうとすること」だと思います。知れば、接し方も変わっていきます。弟も、先生や友達が少し理解してくれるだけで、ずいぶん学校で過ごしやすくなったと言っていました。無理に何か特別なことをする必要はありません。困っているときに声をかけたり、無理に話させずにそっと寄り添ったり、そういう気持ちが弟にはすごく大きな助けになるのです。

社会には、いろいろな人がいます。発達障害のある人、外国か

ら来た人、性別や考え方が自分と違う人。それぞれの「ちがい」を大切にし、おたがいを思いやることが、人権を守ることにつながると思います。

僕は、弟と一緒に過ごす日々の中で、人を理解しようとする気持ちの大切さを学びました。弟のことを「かわいそう」だと思ったことはありません。むしろ、弟のおかげで僕は成長できていると思います。これからも、弟が安心して暮らせる社会になるように、僕自身ができることを考え、行動していきたいです。

優秀賞

「共に歩むいのち」

神奈川県立二俣川高等学校

二年 生井 木彩

私の祖父は、四年前、私が中学一年生の時に急性骨髄性白血病という血液のがんにより他界してしまいました。頑固で寡黙で気が強いけれど、本当は家族を思いやる温かい気持ちを持っていた祖父だったので、私はがんになったということを聞いた時でも、「がんに負けず立ち向かって治療を受けながら頑張れるはず、きっと大丈夫、治る。」と思っていました。しかし、実際に見た祖父の姿は、うつむいて涙を流しながら、「早く死にたい。」「何もしてやれなくてごめん。」「という弱気な言葉を繰り返すことが多く、何かを悔やみ、生きることへの希望が見いだせずにいるように思えました。そして、祖父は、コロナ禍で病院の看護師に看取られて亡くなりました。祖父の姿から、どんな人でも、「死」という運命に直面し、死の淵に立った時の恐怖や絶望感は打ち消すことができないほどであるということに、私は気付きました。家族や友人がどんなに励ましていても、その人にしか分からない孤独や恐怖、悲しみがあるのではないかと考えました。

この経験から私は、「死」とは、恐怖や絶望感、孤独感から生

まれるものだと思います。それは、一人でのいのちの最期を迎えるという、誰もが経験するけど誰もそれを伝えられない、誰も知らない、いつその時が訪れるか分からない暗闇を背負っているようなイメージです。そんな「死」と隣り合わせの状況は、想像するだけで恐ろしく、生きることに対して悲観的になってしまおうと感じます。

しかし、高校でがん教育授業の外部講師の方のお話しをお聞きし、同じ「がん」という病気と闘う方が、元気に前向きに生きていくことを知り、全ての人が「死」に対して絶望を抱えて生きていくわけではないということがわかりました。その方は、自分の経験を交えながら、「がん」や「いのち」との向き合い方を、私たちにお話してくださいました。私と同じ高校生の時に甲状腺がんが見つかり、手術をした後、更に25歳で悪性リンパ腫が発見されるといふ、人生で二度のがんを経験された方でした。二度目のがんと診断された悪性リンパ腫は、完治が難しく、治療では抗がん剤の使用による便秘、吐き気、脱毛といった副作用にとっても苦痛を伴うものでした。「未来が思い描けなかった。」「その方がそうおっしゃった時、私の脳裏に祖父の姿が浮かび、胸が張り裂けるような思いでした。一度、がんという大きな壁を乗り越えたのにもかかわらず、更なる大きな壁が目の前に立ちはだかっているという状況は、私が想像できないほど絶望的なものだろうと感じました。そんな絶望的な状況から、今もなお生きることに対して前向きな気持ちで過ごしているのは、友人や医療従事者の支え

があり、「過去を見て後悔するのではなく現在と向き合って未来を考える」という思考に変わったからだと話されていました。

このことから私は、一人では抱えきれないほど大きな恐怖や悲しみである「死」という存在も、家族、友人、医療従事者など多くの人からの支えがあれば、その恐怖や悲しみを和らげていくことができるのではないかと考えました。つまり、「いのち」とは、自分だけのものではなく、自分の周囲の人々に繋がれてできているものだと考えました。私も、今、こうして周囲の人々に支えられ繋がれた「いのち」があるように、祖父や誰かの「いのちの一部」だったのかもしれないと感じます。そして、自分のいのちは本当に貴重なかけがえのないものであると感じ、温かな思いにもなります。

私は、将来看護師という職業を目指して、現在看護科のある高校に通い勉強しています。今後、自分が看護師という立場になった時に、患者様が「死」に対して絶望や孤独を抱えていたとしたら、その感情を想像しながら理解し寄り添うことを大切にして、自分が患者様の「いのちの一部」になるという意識を強く持ちながら努力していきたいです。

優秀賞

「命を抱いて」

神奈川県立相原高等学校

三年 武藤 美桜

真冬の朝、私はいつものように畜舎に向かった。吐く息は白く、指先がかじかむほどの冷たい空気の中、階段を降りて羊小屋を見ると、思わず息を呑んだ。そこには、羊水にまみれた子羊が2匹いた。1頭は今にも息が絶えそうなほどぐったりしていて、もう1頭はか細く、それでも力強く鳴いていた。驚いたことに、その母羊が妊娠していたことすら、私たちは知らなかった。いつもと変わらない様子で、分娩の兆候もなかったため、まさかこんな形で命と出会うことになるには、夢にも思わなかった。

私はとっさに、授業で習った牛の分娩介助の知識を思い出した。すぐに着ていた作業着の上着を脱ぎ、冷たく濡れた子羊の体をそっと拭いた。そしてまずは、呼吸がしやすくなるように口まわりの羊水を丁寧に拭き取った。少しでも温かさを届けたくて、私は震える手で子羊を抱き上げ、慎重に体を動かした。母羊は疲れた様子ながらも、じつと子羊を見守っていた。やがて、先生が慌てて駆けつけてきた。「どうした!!大丈夫か?」と声をかけられ、私は状況を説明した。先生はすぐに子羊の状態を確認し、迅速に

処置を始めた。このとき私は、自分一人では命を救えなかったことを痛感し、命を守るには、周囲の協力が不可欠であると強く感じた。しかし、子羊はなかなか産声をあげなかった。呼吸は浅く、時間だけが刻々と過ぎていく。先生が息を吹き込み続ける中、私は子羊の体を何度も優しく擦りながら、声をかけ続けた。「生きて、生きて。お母さんが今、必死に鳴いてるよ。あなたの声を待ってるよ。」冷たい手で擦るたび、小さな体からかすかな震えが伝わってきた。必死に命をつなこうとするその姿に、私は思わず涙がこみ上げた。すると母羊が「メエ」と鳴いた。それに応えるように子羊も「メエ・・・」とか細く声を出した。けれども、それでも呼吸は弱く舌の色は次第に紫色へと変わっていった。私は何度も「頑張れ」と声をかけ、生きてほしいと必死に願っていた。1分でも、1秒でも長く生きてほしい。

そう願いながら、小さな体を抱きしめていた。けれども、私たちの必死の介助もむなしく、子羊は静かに息を引き取った。

小さな命が消えていくその瞬間、胸の奥が締めつけられるような悲しみが押し寄せた。しかしその命は、確かにこの世界に生まれてきて、私に大切なことを教えてくれた。それは、命には限りがあり、どんなに願っても助けられない命があるという現実。そして、だからこそ一瞬一瞬を大切に生きる意味があるということ。助けられない命を知ったことで、私は命の重みと向き合い、より強く命を大切に作る人間になれたと思う。

その後、産まれてきた子羊のもう1匹は「つくね」と名付けら

れた。つくねはすくすくと育ち、今では元気に走り回るようになった。その姿を見るたびに、私は命の力強さと、あの日感じた無力さを思い出す。

つくねの存在は、悲しみを乗り越える強さを私にくれた。「助けられなかった命があったからこそ、今日の前にある命を大切にしたい」そう心から思えるようになった。つくねは、私にとって希望であり、学びであり、命と向き合う覚悟をくれた大切な存在。これからも、つくねが幸せに生きていけるように。

生まれてきてくれて、ありがとう。